

第7章 マアーン王朝の最後

マアーン王朝の最後の年月に関しては歴史家達の間で意見が異なっている。例えば王朝の創設を紀元前1000年代に、そしてその終焉を紀元前700～600年代と歴史を記述する者や王朝の創設を紀元前7世紀前後に、そしてその終焉を紀元前100～50年代と歴史を記述する者がある。これ等の人々の根拠（注1）は、ムスナド書体が分派したと考慮しているイエメン及びフェニキアの公文書に書かれた刻文の中で最も古いものが、紀元前1000年以前にその存在を遡る事が出来ないからである。

（注1） 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 第2巻p.178

またマアーン人達の商業活動が紀元後まで継続するという事も考慮されている。しかしながらジャウワード・アリー博士（注2）は、マアーン王朝の最後は紀元後である、ということに比重を置いている。というのは王国の名前が紀元後まで記述されているからである。マアーンの遺跡に関する包括的、科学的探査やその他のものが、王朝の起源と終焉の歴史を規定する責任を有することになる。

（注2） 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 第2巻p.106

紀元前700年の終わり頃、マアーン国の星が地平線に現れ始めたという、第1の意見を持つ者達の間で見解の相違は存在していない。というのは、サバア王朝のマクラブ（神に近い者の意）という敬称を持つ最後の者であり、その王朝の最初の王となるカルブ・イル・ワトルがこの時代にマアーン人達と戦争を起こし、次々と彼等の都市を占領していった。この第1の意見を持つ者達の意見によるとマアーンの諸都市は、その王朝の最後の時代に中央集権的な国家から独立し、自らの諸事を執り行っていた。

そしてこの分離はマアーンの諸都市の併呑とサバア政権への併合においてサバア王朝のマクラブである王を支援してしまうことになった。ジャウワード・アリー博士（注3）はこの事に関して、次の様に述べている。

「マアーン政権の末期と最終的にサバア王朝に併合されるまでに経過した期間中に都市政府と我々が呼ぶことが出来る様な小政権が輩出し、マアーン王朝の弱体化のチャンスを利用し、独立した。そしてこれ等はその後サバア王朝に併合される。マアーン王朝の時代に独立していたこれ等の小国には『ハラム』『ナシャーン』『クムナト』やその他のものがある。アラビア半島の北部にあるアルアラーのアッダイダーンに拠点を置いていた『リヒヤーン』王国は、マアーン王朝が弱体化した頃に独立した政権の一つであると見做すことが可能であるが、元来はカブルが統治していたマアーン王国の領土の一部であった」。

（注3） 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 第2巻p.106

「(考古学者) ハーリフィーの154番」と分類されている刻文から我々は既にヤズマル・マリクと呼ばれたアルハラム国の王の1人を知ることが出来るが、彼は同じ小国のナシャーンを侵略し破壊した。この事は彼と同時代のサバア王カルブ・イル・ワトル王の要請を実行したものであった。そしてカルブ・イル・ワトル王はこの貢献の見返りとして彼に肥沃さや水が存在していたことで知られたナシャーンの領土の一部を与えている。また彼の名は他の多くの刻文に記述されている。

ジャスワード・アリー博士(注4)は、都市国家アルハラムの玉座に座っている王の名をバアスタル・ブン・ヤズムルだと述べている。また同じ玉座に座っている別の王の名前をマアド・ヤクラブ・ライダーンだとしている。そしてマアーン系の都市国家クムナト王国の王も名前をナプト・アリーと述べている。彼は父親のイル・スムウ・ナプトの後王となった人物である。また彼はサバア王朝の首都マアリブ、即ちサバア王朝の政権に従属していた。そしてその証拠として、前述のナプト・アリーの息子のイル・スムウが残した刻文に、サバア人達の神アルムクフに彼が寄進したという事が挙げられる。

(注4) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」第2巻p.106

カタバーン国

カタバーン王国はイスラーム以前のイエメンの歴史において重要な王国の1つである。カタバーン国はマアーン国と同時代(注5)であった。また彼等の言葉はサバア語よりもむしろマアーン語に近かった。

例えばマアーン語と同様に動詞の最初にSinを加えたりする。これはサバア語において動詞の最初に付けられるHaの文字の代わりになるものである。このSinもHaもアラビア語における一人称未完了形のHamzaに匹敵するものである。

(注5) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」第2巻p.171

例えば動詞(AHDaTHa)は、マアーン語やカタバーン語では(SaHDaTHa)になり、一方サバア語では(HaHaDTHa)になる。

それに加えてカタバーン語の刻文はマアーン語の刻文のみならず、古代南アラビア即ちイエメンにおける別の言語の刻文とも共通している。そしてその大部分は個人の目的のために書かれたものであるが、例えば土地の改良や売買、建物の建設、彼等の信仰対象の1つに誓願を捧げたこと等々に関して語られている。そして一人称や二人称の語形変化の欠如から、三人称の語形変化で要約されている。

また詩、散文等の文学的なテキストの欠如や宗教的テキストや祈願や礼拝のテキストの欠如等にも共通性があり、この事は非常に奇妙に思える。しかしながら我々はこの様な例証に対して最終的な判断を下すことは出来ない。刻文に関して発見がなされたものの中で我々に到達した事は未だに少ないのである。そして未だに到達していない事の方がより多いのである。その判断は包括的、科学的な探

査に結び付いた将来のものとなる。

にもかかわらず、我々の元に到着しているカタバーンの刻文の類は、税金や商法やその他の法律そして多くの他の立法に関連した公式文書に関しての古代南アラビアにおける他の刻文類よりも格段に際立っている。

カタバーンが位置していた場所の特定について言うと、研究者達の意見の多くからするとそれはイエメンの南西はパーバ・アルマンダブ海峡から南はアデンへそして南東はバイハーンまで延びていた。

カタバーンの系譜に関していうと、我々が既に「イエメン人達の系譜と居住地に関する要約」の章で知った様に、ヒムヤル系のライーンの氏族として言及されている記述がある。にもかかわらずイエメン人達の系譜の中での彼等の系譜は包括的、科学的な探査に結びついた将来に任せられるべきである。

マアーン王朝が崩壊し、その瓦礫の上にサバア王朝が立脚した時にサバア王朝の新しいライバルとしてカタバーン国が現れた。このサバアとカタバーンの両国の間には多くの戦争が起こっている。その中の一つにサバア王サムフ・アリー・ヤヌーフの時代、即ち紀元前7世紀に、両国の間で起こった戦争がある。

この報告は、前述のサムフ・アリー・ヤヌーフ王の兄弟であるサバア王朝のマクラブであり、王であるカルブ・イル・ワタル・ブン・ザンマル・アリーの時代に遡るアンナスル刻文として知られるサルワーハ刻文に記載されている。

紀元前350～50年頃の時代がカタバーン王朝の時代の中で最も繁栄した時期であった（注6）。即ち刻文や文書がこの時代のカタバーンが南アラビア（イエメン）の諸国にあった王国の中で最も重要なものであったことを示している。何故ならカタバーンはマアーンとサバアの両王朝をその支配下に従属させていたからであった。

（注6） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン著、終章 p 288

前述の時期に諸王の名が知られているサバア政権の存在を考察すると、研究者達はサバアの王朝時代の第3期目と第4期目の諸王達と「サバア及びライダーンの所有者」という名の王国の諸王の半分であると規定している。即ち明らかになったことは、カタバーンがサバアを従えていた事の意味は、その主権と諸領地を伴った独立の承認を強いていたことであり、その単語の本来の意味での知られている様な従属を意味するものではないのである。

またマアリブにあるバルキース（女王の）神殿において発見された刻文に次の様に記載されている。即ちカタバーンとサバア両国の間で起こった戦争は5年間続き、カタバーンが戦争を仕掛け、反カタバーン同盟を結んでいたサバア王朝にライン小国が味方したにもかかわらず、勝利者となり、カタバーンはその後ライン、ザブハーン、サブルの領土を得た。

またカタバーンとサバアそして別の政権（恐らくそれは独立ハドラマウトであろう）との間で新たに起こった別の戦争はカタバーンも崩壊と弱体化を導き、そしてとうとうその主権を失うまでに至り、

最終的には「サバア及びライダーンの所有者」国に併合されてしまう。

ファウワード・フスナイン博士は「古代アラビア史」（注7）の結びの中でこの事を支持し、次の様に述べている。即ち「サバア及びライダーンの所有者」国はカタバーン国の唯一の継承国ではなく、ハドラマウト国もその戦利品のパートナーであった。そしてその領土のカタバーン王国の領土の一部を含めたのであった。そしてそれ即ちハドラマウト国こそが、紀元前25年～紀元前1年にわたる時期にカタバーン王国の首都タムナウを破壊したのであった。

（注7） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン著、終章 p 288

ファウワード・フスナイン博士は付け加えて、カタバーンの王達は或る程度の時期、王国の西部を保持することが出来た。彼等はバイハーンのハリーブ（もしくはフライブ）を彼等の国の首都に採用した。そしてこの事はウエンデル・フィリップス米国調査団の発見が導いた情報に依拠している。

カタバーン国の歴史

ホウメル博士（注8）は、1892～1894年にかけてイエメンを旅行した折りにクラッセルが取得したカタバーンの刻文に関する研究から、カタバーンは王国として紀元前10世紀～2世紀まで存在した、と主張している。また考古学者達はカタバーン国の起源とその終焉の歴史的期日に対して決定的に合意がなされていない、とも述べている。

（注8） 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」第2巻 p.174

ウエンデル・フィリップス米国調査団の高名な地質学者であるアルブライトの年代記には次の様に記載されている（注9）。即ちカタバーンに関するものとして知られた刻文の凡その歴史年代は紀元前10世紀である、と。

（注9） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン著、終章 p 183

ファウワード・フスナイン博士は「古代アラビア史」の結び（注10）の中でこの事を規定し、次の様に述べている。即ち「歴史家が考慮し、依拠出来る歴史年代はというと、紀元前11世紀～10世紀に遡る。それは「ジャーム」というシンボルがある引っ掻き傷の様な刻文が遡及出来る歴史年代である。そしてそれは南アラビアの国から我々の元にやって来た最も古いテキストなのである」。

（注10） 「古代アラビア史」ドトルフ・ニールセン著、終章 p 286

我々が既に知った様に幾人かの研究者達が、ハドラマウトが紀元前25年～紀元前1年にわたる時期にカタバーン王国の首都タムナウを破壊し、カタバーンの王達は或る程度の時期、王国の西部を保持することが出来、彼等はバイハーンのハリーブもしくはハジャラ・ブン・ハミードを彼等の国の首都に採用した、と主張していたのであれば、カタバーンは前述の歴史年代に彼等の最初の首都のタムナ

ウを焼かれる事件の後まで、例えその繁栄した時期よりも小さな領域になったとしても、王国として存続していたのである。

カタバーン諸王のリスト

古代イエメン史に研究者達の元にはカタバーン諸王の名前のリストの幾つかが記録されている。ここにおいては、ジョン・B・フィルビーのリストに言及するだけで、私は充分であると思う。彼はこのリストを著書「イスラームの支柱」の付録に収録し、王達の縁戚関係や系譜に沿ってリストを整理している。

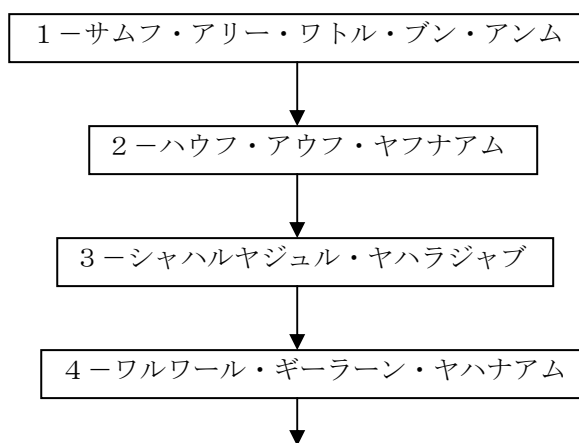
特筆に値することには、カタバーンの王達のいかなるリストや他のイスラーム以前のイエメン諸国の王達の名前のリストが、彼等を規定したり、時代区分に配列されていたりすることを意味しているのではないということである。それが意味することは、彼等の中で知られた人物を規定していることである。そしてこれ等全てのリストは時には名前の数の増減に直面したりしている。この事はイエメンの遺跡に関しての科学的研究や包括的探査の諸方法が充足する度に起こっているのである。

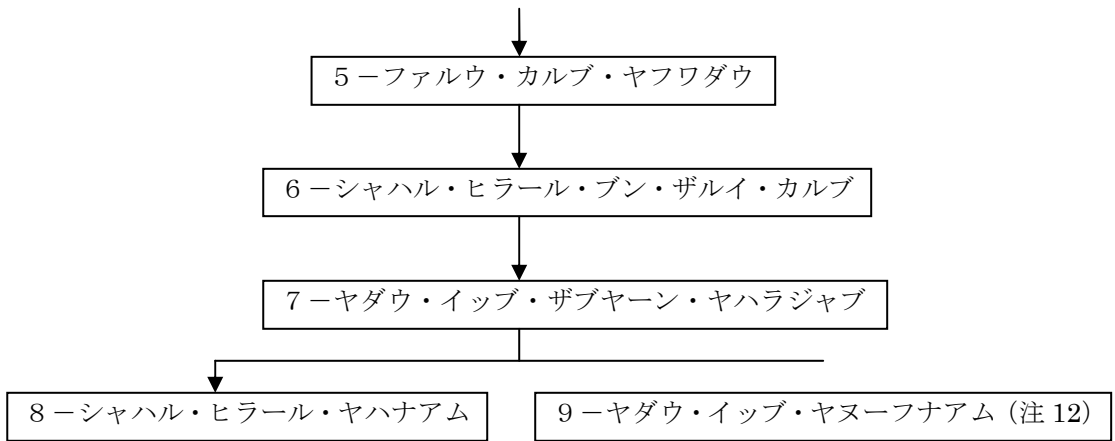
この事はカタバーンの王達が、初期の頃サバア王朝と同様に「マクラブ」の尊称を使っていたからである。この尊称は宗教的な称号であった。「マクラブ」はアラビア語の「近き道」を意味するのであるが、即ち王は神から近い者であり、神と人々との仲介者なのである。

彼等の統治の間にこの宗教的な称号に政治的な「マリク（王）」の称号を加えている。この事はカタバーンの王が聖俗の権力を手中にした統治をなしていたことを意味する。この事はイエメンにおいては革命前までの時代に至まで、また他の国々においては今日に至までも宗教的な「イマーム」と政治的な「王」の称号を手中収めることが、同様に成されていた。

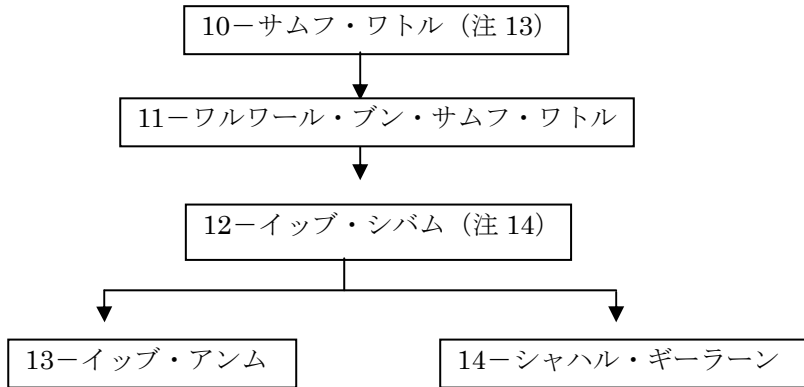
フィルビーの意見（注11）に基づいたカタバーン諸王のリストは下記の如くである。

(注11) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」第2巻p.174





(注12) 彼は他の歴史家達の見解によるとザンマールの子供である。



(注13, 14) 彼は父親の名前がテキストに見当たらない。

1-サムフ・アリー・ワトル・ブン・アンム

彼の父親の尊称は、破壊が破損のために欠落している。

2-ハウフ・アウフ・ヤフナアム

3-シャハルヤジュール・ヤハラジャブ

我々の手元には貴重なテキストがある(注15)。それはこのシャハルヤジュール・ヤハラジャブ王が彼の名とカタバーンの民の名で、カタバーンの諸部族に対して、土地利用とその活用方法に関して発布した法律である。ジャウワード・アリー博士(注16)は付け加えて次の様に言っている。

(注15,16) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」第2巻p.208

即ち「諸部族の首長達や王国の貴族達は数多くの会合を開き、土地の利用方法や諸部族や氏族そして農民達への分配についての意見を交換し合った。そして基本に関する合意が成された後で、それを

王に上申している。それから王がその制定のための命令を發布し、また同様に神官達もそれを制定する。彼らの神殿には農民達が利用する膨大な寄進地があった。従ってこれらの様な法律の發布に関して彼らは重要な意見を持っていたに違いない」。

マアイーン王朝の或るテキストには（注17）、カタバーンとこの王シャハルヤジュール・ヤハラジャブ・ブン・ハウフ・アウフ・ヤフナアムそしてマアイーン政権に於ける政治状況との関係を示した非常に重要な表現が記述されている。ここに翻訳したものを記載する。

「マアイーン王ワクフ・イル・イスウと彼の息子イル・イフウ・ヤシュルの時代にカタバーン王シャハルヤジュール・ヤハラジャブと共に合った」。

この事はマアイーン王ワクフ・イル・イスウが前述のカタバーン王シャハルヤジュール・ヤハラジャブの時代に、彼に対するカタバーンの主権を承認していた事を意味する。

(注17) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 第2巻p.208

ロード・カナークスはまた同様に次の様に見なしている。即ちフィルビーNo.504のテキストは2つの事柄のうちの1つを指し示している。つまりこのカタバーン王シャハルヤジュール・ヤハラジャブの時代にマアイーンとカタバーンが同盟していたかマアイーン政権が上述の2人の王の時代に服従していたかのどちらかである。

またティムナウの瓦礫で発見されたブロンズで鑄造されたライオンと首都の南門（注18）とパイト・バハシュの2つの刻文は、このシャハルヤジュール・ヤハラジャブの時代に遡る。

(注18) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 第2巻p.208

4ーワルワール・ギーラーン・ヤハナアム

彼の名はハリブ市において刻印され発見された金貨に彫られていた（注19）。また同様にワルワール・ギーラーン・ヤハナアムの時代に遡る刻み文が発見されている（注20）。これはシャハジュ族のラスド・イル家のバルアトと言う名の女性が、彼女と自分の財産の保持と彼女が神との約束を履行するために、ザート・ハミーム神とイスタル神に対する捧げ物として、女性をかたどった金製の彫像を献上した際に記録したものである。

(注19,20) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 第2巻p.208

5ーファルウ・カルブ・ヤフワダウ

6ーシャハル・ヒラール・ブン・ザルイ・カルブ

カハラーンにおいて刻文が発見されたが、そこにこのーシャハル・ヒラール・ブン・ザルイ・カルブの名がある。この上述の刻文は次ぎの様に始められている。

「カタバーン王ーシャハル・ヒラール・ブン・ザルイ・カルブが發布し命じた法律は、カタバーン

とジー・アルシャアヌとマアイーン及びシャドワの地のジー・イスタムの民に対するものである。そしてこの法律は土地の利用法に関する4つの民の責務について制定化してあり、それに対して整理された作業を定め、違反者に対しては罰則が課せられると警告している。そして記述されたことを実行する権利を付与された職員、即ち首都ティムナウにいるシャハル・ヒラル・ブン・ザルイ・カルブなのだが、その者を指摘している。そして王は命令を布告し、そしてシャドア門にてそれを公表するように命じた。

このテキストは「そしてシャハルの手が我に知らしめた」（注21）と言う一文で終了する。これは「シャハルの手がそれを知らしめた（署名した）」と言うことであり、即ちシャハル王が自らそれに署名した、と言う事を意味している。そして署名と言う言葉は、今日に至るまで「知る」と言う動詞から派生した「マーク（アラマ）」と呼ばれている。

（注21） 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 第2巻p.212

この事柄はまた農民達が彼らの遂行しなければいけない時を規定している。即ちズー・ファルアム（もしくはズー・ファルア）月の第1日目からジー・ファクフー月第6日目まで、税金を日々にもしくは月々に支払われねばならなかった、と述べられている。

ロード・カナークスはズー・ファルアム月は、カタバーンの農業にとっての1年の1番最初の月であり、ジー・ファクフー月は年の1番最後の月である、と見なしている。そしてこの農業や種蒔きそして収穫に依拠した暦に則って、税金が支払われたのである。

この法律に言及されている4つの民の名前から、次ぎの様な事が明らかになっている。即ち彼らがこの王の統治の下にあったこと。そしてマアイーンの民の一部分か、恐らくマアイーンの民全員が彼に服従していた、と言う事である。

ロード・カナークスはこの刻文に次ぎの様な事指し示す例があると見なしている。マアイーンの民は、カタバーン王シャハルヤジュル・ヤハラジャブの時代にカタバーンに従っていた様に、このカタバーン王シャハル・ヒラル・ブン・ザルイ・カルブの時代にカタバーン政権に従っていた。

しかしながらこの事は彼の見解においては、マアイーンの民が最終的にその独立を既に失っていた事を意味するものではないのだ。

第6～7章 「イエメン概説史」 第1巻「古代史」 p.155—170